

4学部で報告会

「インターンシップ」で学びの意義を再確認

経済、経営、商、ネットワーク情報学部では正課授業として、インターンシップ※(就業体験)を導入している。担当教員による事前指導を経て、夏期休暇中の研修を終えた学生は、後期からの取り組み姿勢が変わると評価が高い。10月から12月にかけて行われた、研修先を招いての報告会で、学生たちは、それぞれの成長をプレゼンテーションした。※カッコ内は学部での科目名

【経済学部】(学外特別
研修) = 20社・21人

企業のみならず、地方
自治体や、公共団体、N
PO、NGOといった研修
先が用意されている。



【経営学部】(企業研修)
= 15社・21人

ビジネスに必要な知識・
マナー・技能を学び、職
業観を確立することを目
的としている。



【商学部】(インター
ンシップ)

07年度からスタートし
た。6月にキャリアデザイ
ンセンターでのビジネス
マナー研修を受けた7人
が6社で研修を行った。



【ネットワーク情報学
部】(企業研修1)
= 20社・20人

コンピュータ、IT関連企
業で、ソフトウェアや
ホームページ制作など
の実際の業務を経験し、「現場で求められる
能力」を知る。



4学部で報告会

学生の目線で芸術のまち「新百合ヶ丘」をPR

経済学部・徳田賢二ゼミ

イルミネーションイベントで写真コンテスト

日本映画学校とCM製作も

小田急線の新百合ヶ丘駅周辺(川崎市麻生区)の活力ある街づくりを目指す「しんゆり・芸術のまち」PR委員会の活動に約170人の専大生がかかわっている。今回は二つのゼミナールと、ネットワーク情報学部の活動を紹介しよう。

地域経済について学ぶ徳田賢二ゼミでは、これまでも川崎市多摩区にある「長沢ひろば」の活性化に協力してきた(445号既報)。

新百合ヶ丘駅周辺で12月8日から展開されたイルミネーションイベント「kirara@アートしんゆり2007」にあわせて「写メコンテスト」を開催し、1カ月で約140件の応募があった。活動の中心となった学生3人に話を聞いた。

PR委員会からの協力依頼を受け、まず「芸術」について深く考察したという。「『アート』という概念だと、小田急線沿線には下北沢という最大のライバルがいる。高尚なものではなく、身近な芸術という観点から『写メ(写真)』というテーマにいきついた」とリーダーの田口能成さん(3年次)。

「企画書の書き方、アポの取り方などをPR委員会の方々から教えてもらい、一つずつ自分の力にしていけた。周囲の支えがあってこそ、実現できました」と2年次の古川修一さん。「撮影する人は多かったが、実際に事務局まで応募してくれる人が少なかったのが誤算」と田口さんは振り返るが、「やりたかったことはほぼ100%実現できた。学生の感性が『しんゆりブランド』の創出に貢献できればうれしい」と話している。

イベントに合わせて、日本映画学校の協力で、約1分間のCMも製作した。中心となっている西村達也さん(3年次)は、「歩いてみると、『芸術の街』というコンセプトがあちこちにあることに気づいた。私たちが企画と絵コンテを作成し、出演もしています。映像のプロと組んだ素晴らしい作品です」と胸を張る。

CMはフェスティバルのフィナーレを飾るイベントとして、写メコンテストの表彰式とあわせ、1月14日、Lミロード1階で放映され、好評を博した。

学生主体で、さまざまなことにチャレンジしている徳田ゼミ。「地域の方々と実際に触れ合い、ディスカッションする中で伝えることの難しさ、楽しさ、信頼関係を築くことの大切さなど、さまざまなことを体感できました」と語り、「『熱意』があれば、周囲の人が動いてくれる」ことを実感したと話してくれた3人の笑顔は充実感に満ちていた。



▲コンテストの宣伝をするゼミ生たち



▲真剣にモニターを見つめるゼミ生たち

文学部・山田健太ゼミ

タウンガイド「しんゆりキャンパス」を完成

魅力のスポットを“足”で取材

情報メディア研究を専門とする文学部の山田健太ゼミの有志が、タウンガイド「しんゆりキャンパス」を製作した。既存のガイドブックにはない若い感性の「手作りガイド」に注目が集まっている。4年次生3人に話を聞いた。

「ファミリー向け施設が多いイメージだったが、取材してみると、学生が楽しめるスポットが多いことがわかった」と話すのは、まとめ役の松尾祐基さん。

「学生が気軽に遊びに行ける街」というコンセプトで、同世代の昭和音大や日本映画学校の学生にインタビューし、さらに実際に歩いて、自分たちの感性に合うスポット情報を得た。約50件の取材先を選定し、アポ取り、写真撮影、文章作成、校正、レイアウトすべてを担当。「ゼミで、出版社や広告代理店などメディア関連企業の見学を行っていたので、作業自体はイメージできた」（加古裕之さん）というが、初めての取材先で「断られ」、意気消沈。「スタートが悪かった分、『あとはやるだけ』という意欲が逆にわいてきた」と振り返る。各200字という枠の中で、いかにそのスポットの魅力を紹介するかに苦心しながら、お金をかけずに楽しめるデートコースなども紹介している。

「しんゆりキャンパス」の名づけ親は岩本裕行さん。「新百合ヶ丘全体が、一つのキャンパスのようなイメージで、そこに行けば、何でもあり、気軽に安く楽しめる、そんな魅力を感じてもらえれば」と話す。岩本さんのお勧めは、デジカメと地図を手に歩き回って作成した「駐車場・駐輪場マップ」だ。

「卒論の時期と重なり、時間的なプレッシャーが厳しかったが、学生最後の年に、皆で協力して『一つの作品』を作り上げることができたのは、自由にやらせてくれたPR委員会の方々のお陰です」と松尾さんは話している。

「自分の担当は責任をもって果たす」という山田ゼミのポリシーと、学生ならではのフットワークで完成させたタウンガイド1万部は、イルミネーションイベントの期間中にゼミ生たち自らが配布した。小田急線沿線の駅（登戸から新百合ヶ丘間）、取材協力先にも配布する。

<問> キャリアデザインセンター事務課（電話：044-911-7189）へ。



▲若い感性で取り組んだ山田ゼミ【提供：マイタウン21】



▲おすすめスポットが満載



▲麻生区役所で配布するゼミ生たち